

「小さな光」

作者名..長山萌花

「小さな光」・登場人物表

ちよ（21）

大学3年生。銭湯でアルバイトをしている。

「小さな光」・慷慨・あらすじ

22歳の大学3年生・ちよは、銭湯でのアルバイトを始めるまで、なんとなく過ぎていく日々を抱えていた。22に映る友人たちの輝かしい日常と比べるたび、自分は何者にもなれないような気がしてしまふ。しかし、銭湯で働くうちに、彼女は気づく。幸せの形は人それぞれで、誰もが見えない苦しみを抱えていることを。他人の価値観ではなく、自分だけの幸せを見つけること。それこそが、生きづらさから解放される一歩なのかもしれない。

企画意図

20歳の大学生として、学業、アルバイト、そして就職活動に追われる毎日。

忙しさの中で、自分自身について深く考える余裕はなかった。

就職活動が始まると、高学歴や高収入といった「社会が求める理想像」が常に頭をよぎるようになる。企業説明会や周囲の就活生、家族との会話の中で、「上を目指すこと」が当たり前のように求められている感覚を強く抱く。その度に、社会の厳しさや自分とのギャップを痛感するようになった。

しかし、幸せとは他人の基準で測るものではなく、自分自身のさじ加減で形を変えられるものではないか。幸せは遠くにあるものではなく、日々の生活の中に、小さな瞬間や出来事として確かに存在している。自分がその小さな幸せを積み重ねていけば、自然と周りにも幸せを与えられるのではないか。

本作では、日常の中で感じる「生きづらさ」と向き合いながら、自分なりの「幸せ」を見つける姿を描く。何気ない日常の中に潜む喜びや希望を、どのように捉えるか―幸せと感ずるのか、苦しさと感じるのか。それはすべて、自分の視点や心のあり方次第で変わる。

この作品は、忙しい現代社会を生きる私たちにとって、立ち止まって「自分にとっての幸せとは何か」を問いかけるきっかけとなることを目指している。

卒業制作としての完成を目標にしており、物語は現在も執筆を進めている最中である。

薄明かりの中の静かな部屋。新聞配達バイクの音が遠くから聞こえる。近くの家の犬が少し吠え、街が少しずつ目を覚ます。

ベッドの上で仰向けに寝転がり、天井をじっとみつめる。カーテンから差し込むわずかな光が、部屋を薄暗く照らしている。夜が開けても一睡もできず、ただ無為に時間が過ぎるのを感じながら、何もする気になれない。意識だけが中に浮いたように、ぼんやりと、その瞬間に身を任せる。

ゆっくりと目を閉じて、静かに息を吐く。再び開けると、天井に映る淡い影が、わずかに揺れている。彼女の瞳は、焦点が合わず、思考の波に飲み込まれていくようだった。

片手を伸ばし、スマホを手取る。画面が光を放ち、彼女の顔を照らす。

タイムラインをスクロールする。友人たちが笑顔で写る旅行の写真。画面の向こう側に広がる、幸せが、静かに彼女を圧倒する。

指が止まり。スクロールが途切れる。

画面に映る彼らの、輝く世界と、自分がいる静止した世界。その落差が、胸の奥で鋭く刺さる。

静かに、ため息をつく。スマホをベッドの上に放り投げる。

布団を頭まで被る、暗闇の中、まぶたの裏側にはまださっきの画面が焼き付いている。静かに沈んでいくような感覚が、胸の奥に広がる。

ちよ（心）何となくすぎていく日々に焦りを感じる。

2.

昼のちよの部屋

アラームが鳴る静寂を破る甲高い音が部屋中に響く。時計が12時を指す。ちよは、手探りでアラームを止める。

しばらくし、ゆっくりと目を擦り、起き上がる。体が鉛のように重い。

ちよは、もう一度、布団に戻り、蹲る。起きなければならぬという考えが頭をよぎるが、その考えが強くなるほど、動けなくなる。

寝ては起きての繰り返し。

洗面所へ向かい、鏡の前に立つ。ぼんやりとした視線の先に映るのは、青白い顔。目の下に深いクマ。

ちよは、無言のまま、鏡を見つめる。頬をつまみ、引っ張る。ぐにやりと歪んだ自分の顔。しばらくそのまま見つめ続ける。

ふと我に返り、水道の蛇口をひねる。冷たい水が流れ出し、両手ですくって顔を洗う。水滴が滴るまま、タオルを手取る。顔を拭いた後、また鏡を見つめる。何かが変わったわけではない。ため息。

キッチンへ向かう。インスタントの味噌汁を作り、湯気の立つ茶碗を両手で包む。味噌汁を啜りながら、飼っている金魚の姿をぼんやりと見る。茶碗を持ち上げ、味噌汁をゆっくりと、啜る。暖かさが喉を通るが、心まで温まることはない。空になった、茶碗をシンクに置く。ちよは、ジャージを羽織り、無言で玄関へ向かう。イヤホンを耳に付け、扉を開ける。

バス停の前に立つちよ。バスが目の前到着し、定期券をかざし乗車する。車内は少し混んでいて、バスの一番後ろの席に座る。窓の外を覗くと、たくさんの人々の日常が見える。バスが信号で止まるたび、外の景色がより、繊細に見えてくる。あそここの店、あんなに並んで、今日何かあるのかな、

バスの中は、外界の動きと切り離れたような特別な空間。車内で巻き起こる、物語。窓から見える物語。たくさん的人生が交差している。ちよは、いろんな人を観察しながら、大学に向かっていく。

講義を受けるちよ。空白のノート。周りの学生たちが手を上げて活発に意見を交える中、ちよはただボーっとしている。

何となくすぎる日常に、焦りを感じてるちよ。

バス停の前に立つちよ。バスが目の前に到着し、乗車する。一番後ろの席に座る。

今日も別に何かがあったわけではないが、心の中にぽっかりとした不安が絡みついでいて、それがなかなか解けない。まわいの会話も、車内の音も全てが遠く響いているだけのような気がする。

イヤホンを両耳につけ、音楽を流す。

ぼすの窓越しに千夜の不安げな表情が映る。ガラスの向こうに映る自分は、目を合わせることなく、まるで他人のように無表情。

コインランドリーの中。時間が止まったような空間。ちよが椅子に座り、手には、渡辺淳一の「鈍感力」を持っている。何度も同じページを繰り返してよんでいるが、内容が頭に入ってきて来ない。

洗濯機の回転の音だけが静寂を埋める。ガラスの向こうで、衣類がぐるぐると回り続ける。

ちよ（心）ぐるぐる回って、何も進まない。

これが私の人生なのかもしれない。何も変わらない。どこへ向かっているのか、全くわからない。

ふと、洗濯機の窓に自分の顔と目があう。ぼんやりとした視線。ちよは息を呑むようにして、そっと目を逸らし、本に視線をもどす。しかしページは滲んで見えず、内容が掴めない。

その瞬間、ページが風もないのに、捲れ始める。

同時に洗濯機の回転が徐々に速くなり、音が波動のように響く。ちよはじつと見つめる

7.

帰り道

バスを降りたちよは、今日は何となく、いつもと違う道で帰ることにした。住宅街の中に、銭湯があるのを見つける。銭湯は、昔ながらの外観で、常連客らしき人たちがたくさん出てきた。入り口に近づいてみると、アルバイト募集の張り紙を見つめる。ちよの心に、少し変化を求める気持ちが湧いた。なにか自分を変えたくて、焦る気持ちが、少しだけ動く。

ちよは、チラシを片手に、その銭湯に足を踏み入れる。店に入ると、靴を脱ぎ、靴箱にしまう。扉を開けると、フロントに、一人の男性が座っている。ちよは、チラシを片手に、少し、緊張しながら、声をかける。

ちよ

「始めまして。アルバイト、まだ募集ですか」
ちよは、自信のない声で、男性に質問した。

男性

すると、男性は、勢いよく、
「アルバイト！！」「興味あるの！大歓迎だよ！
ぜひ入ってほしい！」外見は少し怖そうな男性だが、彼の明るい対応に安心感を覚える。

男性

「早速いつから入る？」

ちよ

「あ、いつでも行けます。」

男性

「じゃあ、明日から、働いてもらおうかな！業務内容はそんなに難しくないので安心して！気持ちさえあればできるから！持ち物は、濡れてもいい服と、メモできるもの、暇を潰すものぐらいいな・・・あ、お風呂入りたいんだったら、シャンプーとかタオルも持っておいで！」

ちよは、驚きながらも頷き、話が終わると、店を後にする。

ちよは、不安を抱えつつも、なにか、少しだけ変わった自分に気づき、胸の奥にほんのりとした、温かさを感じる。歩きたびに足元が、少し軽く、感じて、歩幅が自然と広がる。
歩きながら、少しだけ弾みながら、自宅へと向かう。

薄明かりの中の静かな部屋。新聞配達バイクの音が遠くから聞こえる。近くの家が少し吠え、街が少しずつ目を覚ます。

5時。目覚ましが鳴る。

ちよは、まだ眠い目を擦りながら、布団から体を起こす。体が重く、ベッドから起き上がるのに少し時間がかかる。高校生以来、こんなにも早く起きるのは久しぶりだった。

洗面台の前に立つ。冷たい水で顔を洗う。

鏡に映る自分を見ると、いつもより、ほんの少しだけ、ひょうじょうが明るくなったように感じた。キッチンへ向かい、インスタントの味噌汁を作る。湯気が立ち上がる茶碗を両手で包みながら、ちよは静かに金魚の姿を見つめる。

着替えをし、カバンに持ち物を詰め込む。上着を羽織り、イヤホンに耳につけ、扉を開ける。

外の空気が冷たくて、少しだけ、目覚めたような気がする。

10.

アルバイトへ向かう道

通りは静まり返り、まだ、人の姿はほとんどない。ちよはゆっくり歩き出す。周りの街灯が、まだ暗い道を照らし、ちよはただ足を動かし続ける。

11.

銭湯

銭湯の扉を開ける。暖かな空気がちよの皮膚を包む。ほのかに香る石鹸の匂いと、静かな空間の中で、響く水音がちよの耳に届く。ちよ、ゆっくりと中へ入る。

「おはようございます」

心細そうな声で、挨拶をし、靴を持ち、ロッカーの七番に靴をしまう。

店長がレジの前でお金を数えながら顔をあげる。

「お！おはよう！ようきてくれた！まずは着替えなあかんから、更衣室使ってな。」

「はい・・・」

ちよは、まだ少し不安そうな表情を浮かべながら、更衣室に向かう。更衣室で、服を取り出し、着替える。着替えが終わるとちよは、再び店長の元へ戻る。

「よし、じゃあ、今日は掃除から始めていこうか！俺がちよっと見本見せるし、こんな感じでほしいねん。」

ちよが頷くと、店長は業務内容を詳しく教え始める。

店長 「ここも、汚れ溜まりやすいから、念入りに頼むぞ」

店長 「それから、温度計の使い方な、湯温は40から42度ぐらいを目安に見てほしい。お客様が気持ちよく入れるように、常に湯温をチェックしないとあかんから、毎回測っておいてな。」

ちよ 「わかりました。40から42度ですね！」
湿ったメモ帳にメモを取るちよ。

店長 「うん、それと、湯温がちょっと低いと思ったら、少しずつ、お湯を足すけど、急に入れるんは危険やから、気をつけて。」

店長 「あ、あと、浴槽内のタイルに、汚れがついてることもあるから、たわしで擦って落としてな。とくに石鹸のカスとかが溜まりやすいから」
ちよは頷き、メモを取る。

店長 「浴槽内の掃除が終わったら、脱衣場の棚とか、カゴ、イスとかを消毒して、拭いてほしいねん。位置は、今置いてあるところに、おいといてくれたらいいし！」

ちよ 「了解です！ありがとうございます！」
「ほなよろしくね」

店長 その後、ちよは、掃除を始める。
たわしを手に、浴槽の床を丁寧に掃除していく。
湯がまだ入っていないため、水の流れる音が、響く。ホースで浴槽全体を流し終え、風呂に湯を溜める。水が勢いよく流れ込み、タイルを打つ音が響く。その音はどこか、少し冷たく、硬い音。
ちよは、その間に、脱衣場に行き、ロッカーやカゴ、椅子などの消毒を始める。消毒液を手に取

り、一つ一つ丁寧に拭いていく。ちよの、前髪は、湿っており、額にかかる紙が水滴を落とす。ズボンの縁も濡れて、濃い色に染まっている。しばらくして、浴槽に湯が溜まると、ちよは、ふたたび、浴室に戻り、温度を測りにいく。温度計を手にとると、湯の中にそっと差し込む。二度。言われた通りの温度で、少しだけ微笑む。掃除を終えた綺麗な浴槽にたまる透き通った湯を眺める。その色は。全てがリセットされたような清らかさ。曇っていたちよの心は、少し晴れたような気がした。湯面に映る光がゆらゆらと流れるのを見ながら、ちよは、心の中で、ほんの少しだけ、安らぎを感じる。

12.

フロント

ちよ

掃除終えてフロントに戻る。タオルで、軽く手を拭きながら、カウンター越しに店長を見つける。店長は、釣り銭の確認をしながらレジ周りを整えていた。

「掃除終わりました。」

戻ってきた時には、すでに、6時30分。お店が開店する10分前。

店長

「おっ！ちようどええなもう直ぐ回転や！」

レジ台に鍵を置くと、店長は、ちよの方を向き、にこりと笑う。

店長

「初めての仕事、どうやった？」

ちよ

「思ったより、体力使いました。」

正直な気持ちだが、素直に口に出た。掃除をしている間は夢中だったけど、終わっていると、体の疲れがじわじわと押し寄せてくる。

店長

「そろそろや、けどやってくうちに、慣れてくるわ。無理はせんときな。しんどなったらいうんやぞ」

ちよは小さく頷く。

13.

銭湯の外

時計の針が、10時を指そうとしている。開店の時間だ。

店長

「ほな、ちよちゃん。暖簾かけにいこか。」

ちよ

「あ、はい！」

少し戸惑いながらも、ちよは店長の後を追ひ、入り口へ向かう。店の入り口には、折りたたまれたままの、深い赤色の暖簾。その中央には、「ゆ」の文字がある。店長は、暖簾を手にとると、ちよの方を向いて微笑む。

店長

「せっかくやし、今日はちよちゃんがやってみるぞ。」

ちよ

「え、私が？」

店長は頷き、暖簾をちよに手渡す。ちよは、少し緊張しながらも、受け取り、暖簾を入り口にかけて。その瞬間、風に揺れ、暖簾がふわりとなびき、その隙間から、たくさんのお客さんの列が見えた。ちよは思わず、息を呑む。

暖簾が揺れる中、最初の客が、脚を踏み入れる。

14.

フロント

暖簾をくぐり、お客さんが次々へと店内へ入ってくる。フロントに戻ると、店長がレジの前で、会計をしていた。

店長

「ほな、ちよちゃん。つぎは、受付やってみよか」

ちよ

「はい！」慌てて、受付に向かう。

店長

「料金にかんしては、ここに書いてある通りやし、その分のお金もらって、お釣り返してあげて」

ちよは頷く。

客の一人が、入り口からカウンターに近づいてくる。七十台ぐらいの男性。常連らしく、慣れた手つきで、財布を取り出し、五百十円をカウンターに置いた。

二代男性

「おっ、新しい子やな。」

ちよ

「はい！！今日から、、、よろしくお願いします!!」少しぎこちなく、頭を下げながら、レジの前に立つ。

男性は笑顔でおくの脱衣所へと向かう。

店長

「ええ感じやん。最初はそれでええねん。」

ちよ

「あ、、、よかった、、、」

少しホッとした表情を浮かべたその瞬間、次の客がやってくる。

二時近くになると、フロントは落ち着き始める。常連客のほとんどは、湯に浸かり、フロントには人の気配がほとんどない。ちよは、番台の椅子に腰を下ろし、今日描いた、変形したメモ帳を読み直した。

湯気の立ちこめる脱衣所の奥からは、笑い声が聞こえてくる。

15.

銭湯バイト1日目の帰り道

銭湯を出ると、外の風がひんやりとほおを撫でる。まだ日は高いが、朝とは違う、少し柔らかな

風。ちよは、ちいさく息を吐く。

全身がじんわりと重く感じる。腕も足も、
けれどその疲れは、嫌なものではなかった。
むしろ心の奥に溜まっていたものが一緒に、流れ
ていったような気がする。

ちよは歩き出す。少しだけ、歩幅を広げ、自宅へ
と向かっていく。

16.

ちよの家

玄関のドアを開けると、ひんやりとした空気が迎
え入れる。昼間の銭湯とは全く違った、静寂に包
まれた空間。ちよはカバンをおき、ゆつくりと靴
を脱ぐ。つかれた、身体が重く感じる。

机の上にパソコンを開き、オンデマンド授業の動
画を見始める。ちよは、ラーメンを啜りながら、
講義を受ける。画面の向こうでは、教授が、スラ
イドを動かしながら、永遠と話している。ちよの
耳には、その言葉が、ただの音として流れていく
だけだった。ゆつくりと眼を閉じる。

17.

朝のちよの部屋

薄明かりの中の静かな部屋。新聞配達のバイクの
音が遠くから聞こえる。近くの家の犬が少し吠
え、街が少しずつ目を覚ます。

5時。目覚ましが鳴る。

ちよは、まだ眠い目を擦りながら、布団から体を
起こす。洗面台の前に立つ。冷たい水で顔を洗
う。

鏡に映る自分を見ると、昨日よりも、ほんの少し
だけ、表情が明るくなったように感じた。キッチ
ンへ向かい、インスタントの味噌汁を作る。湯気

が立ち上がる茶碗を両手で包みながら、ちよは静かに金魚の姿を見つめる。
着替えをし、カバンに持ち物を詰め込む。上着はおり、イヤホンを耳につけ、扉を開ける。
外の空気が冷たくて、少しだけ、目覚めたような気がする。

18. アルバイトへ向かう道

通りは静まり返り、まだ、人の姿はほとんどない。ちよはゆっくり歩き出す。
周りの街灯が、まだ暗い道を照らし、ちよはただ足を動かし続ける。

19. 銭湯

挨拶。掃除

20. フロント

営業開始。常連の人に覚えおてもらう。
褒められる。嬉しい。

21. 帰り道

昨日の帰り道よりも晴れた感じ。
晴れた気持ちで散歩をして帰る。

22. 帰宅後のちよの部屋

21時消灯。

ちよはこれまで、スマホの画面を無意識にスクロールし続け、知らず知らずのうちに情報を拾いすぎていた。

友人たちの輝く日常、自分とは違う誰かの成功、終わりのない比較の中で、気づけば心が沈んでしまふこともあった。

けれど、銭湯での仕事を始めてから、少しずつ変わりはじめた。

手を動かし、浴槽を磨き、床を擦る。ただ目の前のことに集中する時間は、余計な思考を静かに遠ざけた。

人と比べることより、自分のペースで生きることが大切なんじゃないか・・

そう思えたのは、湯気の立ち込めるこの場所で、日々のルーティンを積み重ねてきたから。

情報に振り回されていたちよは、今、自分に合った生き方を少しずつ見つけ始めていた。

薄暗い熱帯魚店の中。数多くのカラフルな魚たちが水槽の中を泳いでいる。店内には水と音。

ちよは水槽の前に立ち、魚たちの動きをじっと見つめている。無言で魚たちの動きを追い続ける。狭い世界でただ生きているのって、しんどい。

ちよは、魚たちに顔を近づける。

25.

帰宅

ちよは急ぐように家へと帰る。
街の明かりが流れるように、後ろへ消えていく。

26.

夜ちよの家

静寂の中、机の上、小さな水槽の中で、金魚が泳いでいる。ちよは椅子に腰をかけ、何かを考えながら、その小さな魚を見つめている。
(心) この子に自由はあるのか。

ちよはそつと手を伸ばし、水槽ごと抱き抱える。

27.

夜の川

水槽を抱えたまま、静かな住宅街を抜け、小道を走る。街灯が点々と続く中、ちよの影が揺れる。少し息が上がる。

ちよはそつと川辺に膝をつき、水槽を足元に置く。金魚は相変わらず、無邪気に水の中をただよっている。ちよは静かに、水槽の中の金魚を両手で掬いあげる。

ちよ

「あなたの好きな生き方をすればいい」
優しく水面に手を近づける。
金魚は水面を溶け込むようにして、するりと指の間を抜け、夜の川の中へ泳ぐ。
ちよは、じつと金魚の姿を目で追う。水面には、月の光が揺れている。

28.

朝ちよの家

窓から柔らかい朝の光が差し込む。
いつもなら重く感じていた布団が、今日は少しだけ、軽い。ちよは自然と眼を覚ます。
時計を見る。
そつと、深く息を吸い込む。

29.

バイトに向かう

外に出ると、夜の空気がひんやりと、肌に触れる。ちよはそつと目を閉じ、深く息を吸い込む。
一度。二度。
二つ深呼吸。
ゆっくりと坂道を登り始める。最初は歩いていたが、気づけば、足が早くなっていく。
風が頬を撫でる。
ちよの足は次第に軽やかになり、駆け出す。
荷物を放り投げ、ただ前を向いて坂道かける。
軽やかに。